

日本家屋には光がよく映える

国際ロータリー2660 地区ガバナー事務所職員 大西麻容
画家 小島由佳理



梅田から、電車とバスを乗り継いで辿り着いた羽曳野市郊外。最寄のバス停を降りて近所の交番に畑田家までの道を尋ねると、なんとこの地域は畑田家だらけだとか。同じ名前の表札を数えながら畑田家を探し当てる。

玄関をくぐり、思わず小さな歓声をあげた。そこにあるのは生まれて初めて見る竈だった。

その静かでおだやかな美しさに心を奪われ、今日は素晴らしい所に来たのだなと胸が躍った。

興味を惹かれたのは「つし(屋根裏部屋)」へ続く長い梯子だった。好奇心に駆られて、梯子を登る。本当に屋根裏の物置場だったのかと目を見張る立派な梁がどっしりと構えていた。

日本家屋の窓は、西洋のものに比べると決して大きいとは言えない。部屋の明かりも多くはない。

一番有効な明かりは窓から差し込む太陽光だ。

生憎、この日は曇りで、室内は全体的に薄暗かった。それにも関わらず、目が慣れてくるとそこには光の存在感があった。

窓から飛び込んでくる限られた太陽光。その光は部屋に吸い込まれるように闇と一緒に、その残り香のようなやさしい明りが、和紙に描かれた墨汁のように濃淡のある陰影を作る。その空間を心地よく感じる頃には、光がとても眩しく、そしてとても有難いものを感じた。

日本家屋には光がよく映える。

写真と文：大西麻容





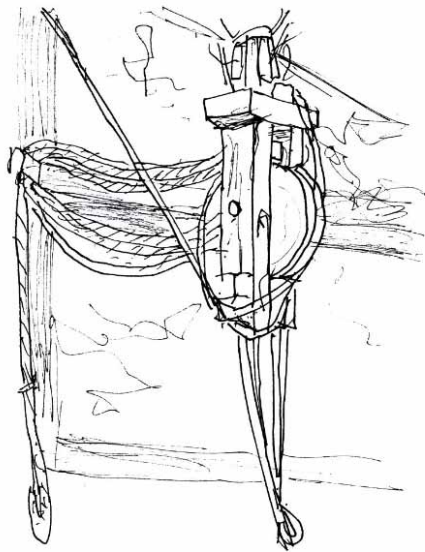
あっ！　すごい！
梁が私たちを見守っているのだ。誰か出そうな雰囲気。



昔、活躍していた道具たちは、家主が帰ってくるのを待っているでしょう。



明暗のバランスがとれたモチーフを見つけて、描いてみたくなった。
いつまでも残るだろうか？



現役を終えて、やれやれと思わず、また活躍するのを待っているだろうね。

私は歴史には弱いですが、畑田家に来て驚いたのは、主屋の土間の大戸、納屋の二階の屋根裏、土間の太い梁でした。

以前、滋賀東近江市蒲生にある、ガリ版の発祥地の堀井家をスケッチした事があります。昔の生活の有様がそのまま残されているのが共通点であり、自分たちに江戸時代の庶民生活ぶりを物語ってくれたように感じ、また、スケッチのモチーフが増えて、嬉しかったです。未来の人たちに文化を伝える材料として残して欲しいと思います。

絵と文：小島由佳理